

体育会学生の社会人基礎力について

～キャリア教育の観点から～

1190500 都築 海登

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 緒言

現在、体育会学生に対して賛否両論様々な情報が発信され、話題となっている。東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催や UNIVAS の設立など、スポーツに対して追い風が吹く中で、体育会学生のスポーツ以外の取り組みや学生生活、スポーツに対する考え方など、在り方そのものを見直す必要があるという声が強まっている。UNIVAS とは、平成 30 年度中に設立予定の大学スポーツに係る大学横断的かつ競技横断的統括組織の新法人名称である（スポーツ庁、2016）。なお、本研究では、体育会学生を A0 入試または公募制スポーツ推薦入試というスポーツに関する能力や実績を重視する試験によって入学し、大学において 3 年間以上部活動に在籍した学生として定義する。

数年前までは、体育会学生は優秀であるという意見が多かった。図 1-1、図 1-2 からわかるように、一般学生と比較しても内定率や内定先の企業の上場率が高く、企業から必要とされていることがわかる。また、この理由として、葛西（2012）によると、体育会学生は経済産業省が定める 3 要素 12 項目からなる社会人基礎力が高く、企業も積極的に採用を行っていることが報告されている。また、萩原ら（2017）によると、大学での運動部経験が社会人基礎力の形成に影響があることが明らかにされている。さらに松繁（2005）の研究によれば、大学卒業後の昇進には大学時代の部活動やサークル活動における主将やマネージャー、主務、会計の任に就いていたことが影響していることを明らかにしている。これらのことから、体育会学生が優秀であり卒業後も順調なキャリアを形成することができるという指摘が多い。

しかし、体育会学生全体を一括りにして優秀であると一概にいえるのだろうか。近年では、大学アメフト部におけるタックル問題をはじめ部活動における生徒の主体性を奪う指導法や度を越えた勝利至上主義の方針により、主体性が低い学生がいることが浮き彫りとなっている。また、2018 年に日本経済団体連合会が日本の 443 企業に「企業が学生に求める

資質・能力」を調査したところ、「主体性」・「実行力」・「課題設定・解決能力」が上位となっており、逆に「チームワーク」や「傾聴力」は低い傾向にあった。これより、学生に対してリーダー的役割やイノベーションといったものを期待していることが伺える。

さらに、体育会学生が社会のグローバル化に順応できていない事実がある。TOEIC の運営団体である ETS が国内の上場企業 3254 社の人事部に対して、「採用時に TOEIC スコアを参考にしているか」という調査をしたところ、およそ 7 割の企業が参考にしていると回答したように、企業側も社会人基礎力だけでなく、語学力も求めており、体育会学生がその環境に順応できていない可能性が示唆される。また、サービス業大手の楽天株式会社では創業当初は体育会系出身者が多かったが、英語公用語化に踏み切ったところ、会社の定める英語力に達成できなかった体育会系出身者が多数辞職したという話がある。また近年では、体育会学生がキャリアに対して不安を抱えていることも注目されている。株式会社大学スポーツチャンネルが 2016 年に体育会学生 224 人に対して行った調査では、約 4 割の学生が就職活動に対して不安を感じているといったデータや、濱崎（2016）によると高知工科大学のスポーツ推薦経験者のうち約 44% が自身のキャリアについて不安を感じていることが明らかにされている。

このようなデータがある中で、どのような体育会学生が社会人基礎力を向上させているのか、またその要因について明らかにすることで、不安を抱える体育会学生にとって有益な知見になると考える。私自身、16 年間スポーツを継続し、いざ就職活動を行う中で、他大学の学生と比較した際、留学やアルバイト経験のある学生に対して「劣り」を感じることで幾度かあり、スポーツ以外の経験がないことに劣等感を感じていた。この経緯も本研究を進める原動力となった。

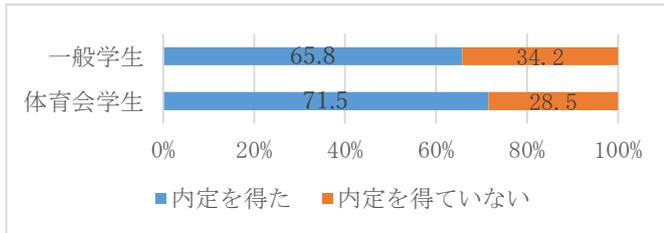


図 1-1 体育会学生と一般学生の内定率（株式会社ディスコ調べ、2017）

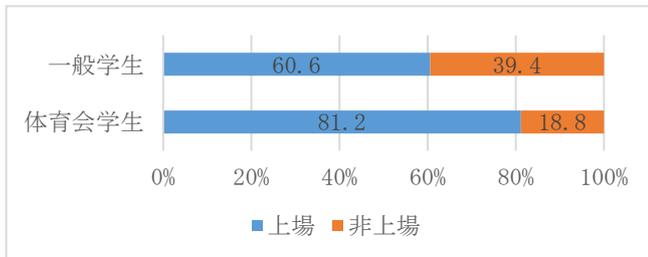
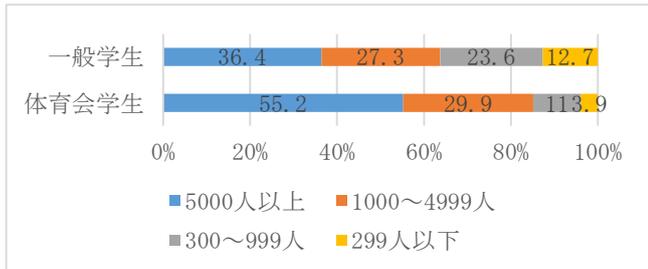


図 1-2 体育会学生と一般学生の内定先企業の従業員数と上場の有無（株式会社ディスコ調べ、2016）

2. 目的

本研究の目的は、体育会学生の現状を、競技成績や学業成績（GPA）、社会人基礎力、就職活動に対する満足度の観点から分析し、自己実現を満足に達成している学生の共通点を明らかにすることとする。

3. 方法

本学の現 4 回生でスポーツ推薦制度にて入学し、体育会部活動に在籍していた学生のうち、同意を得られた 11 名に対してインタビュー調査を行った。就職活動に関するインタビューを行い、キャリアの観点から考察を行うため大学 4 回生に限定した。調査期間は 2019 年 1 月 18 日から 2019 年 1 月 31 日であった。回答を求めた項目は以下の通りである。

①個人属性：部活動種目と部活動における役職、大学部活動における自己の最高成績、学業成績、大学内外での表彰の有無の回答を求めた。

②社会人基礎力尺度：経済産業省が定める定義に基づいて評価項目を作成し、5 件法で回答を求めた（1：あてはまらない～5：あてはまる）。

③社会人基礎力尺度に対する自己評価について、項目ごとに現在の評価の要因となった経験について回答を求めた。

④就職活動について、満足度を 5 件法で回答を求め（1：あてはまる～5：あてはまらない）、自身のどのような大学部活動経験が生きたか、部活動経験以外で生きた経験やスキルはあるか、また経験しておけば良かったことや就職活動全体の振り返りについて回答を求めた。

4. 結果

インタビュー結果のうち、個人属性、社会人基礎力自己評価、就職活動満足度を表にまとめた（表 1）。社会人基礎力自己評価については、12 項目の平均値と、前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の 3 要素に分類した際の平均値に大きな差が見られたため、12 項目の平均値と、3 要素ごとに結果をまとめる。まず、社会人基礎力全体の平均値の結果に関しては、以下の通りである。上位グループの学生に共通して主将や副主将などのリーダー的役職を経験しており、競技成績も高く組織の中心を担っていたことがわかった。また学業成績に関しても GPA 値 2.00 以上であり、学内上位 60%以上であり一定の学力を得ていることがわかる。就職活動満足度との相関関係はみられなかったが、インタビュー調査を通じて、就職後の人生設計や自身のやりたいこと、なりたい人物像が具体的に考えられており、就職活動に対して前向きである傾向が強いことが分かった（A・B）。競技種目による差異や影響はみられなかった。

逆に、下位グループの学生に焦点をあてると上位グループの学生群と比べると競技成績や学業成績（GPA）が若干低い傾向にあった。就職満足度に相関関係はなかったが、インタビュー調査を通じて企業研究や学力検査に対して後悔を残す学生が多い傾向にあった（J・K）。

次に、社会人基礎力の 3 要素（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）に関する結果は以下の通りである。前に踏み出す力に着目してみると、上位グループは役職と学業成績（GPA）に関係性はみられなかったが、競技成績が高く、チームのエースとして活躍している共通点があった。また、インタビュー調査を通じて、就職活動に対して大手志向が強く、5 年後、10 年後のキャリア設定が明確であり、向上

表 1. 調査結果（個人属性、社会人基礎力自己評価、就職活動満足度）〔緑：上位グループ、黄：下位グループ〕

	種目	役職	自己の最高成績	学業成績 (GPA)	社会人基礎力全12 項目平均値(5件法)	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	就職活動満 足度(5件法)	アルバイト 経験の有無
A	卓球	主将	個人戦四国1位	2.27	4.28	4.33	4.33	4.17	4	有
B	ソフトテニス	主将	個人戦西日本2位	2.23	4.17	4.33	4	4.17	5	有
C	卓球	主将	個人戦四国1位	2.2	4.06	4.67	3	4.5	3	無
D	バスケットボール	副主将	団体四国3位	2	4	4.33	3.67	4	3	有
E	卓球	なし	なし	2.5	3.89	3.33	3	4.33	3	無
F	ソフトテニス	なし	個人戦四国1位	1.5	3.72	4.67	3.33	3.17	4	有
G	バレーボール	なし	団体四国2位(補欠)	1.4	3.61	3.33	3.33	4.17	4	有
H	剣道	副主将	団体西日本ベスト8	1.7	3.56	4	3	3.67	5	有
I	卓球	なし	個人戦四国ベスト8	1.82	3.39	2.67	3.33	4.17	4	有
J	バレーボール	なし	団体四国2位(補欠)	1.57	3.22	2.67	2.67	4.33	4	有
K	バレーボール	主将	団体四国2位	2.3	3.11	3.67	2.33	3.33	3	有

心が強い傾向にあった（C・F）。下位グループでは、役職は担っておらず、競技成績や学業成績（GPA）共に低い傾向にあった。就職活動に対して、地元志向が強い傾向にあった（I・J）。

考え抜く力に関しては、上位グループ、下位グループともに社会人基礎力全体の平均値と類似した結果となった。

チームで働く力に関しては、全体としての平均値がそもそも高く、インタビュー調査を通じて、ほぼ全員が部活動経験を通じてチームで働く力の向上に繋がっていると回答している。上位グループの共通点として、卓球部、高い学業成績（GPA）、アルバイト経験が無いことがあげられる。

5. 考察

本研究の目的は、体育会学生に対して、様々な観点から分析し、自己実現を達成している体育会学生の共通点を明らかにすることであった。社会人基礎力に対して自己評価が高い学生ほど自己実現への達成度や満足度が高い傾向にあったため、社会人基礎力を軸に考察を行う。まず、社会人基礎力12項目の平均値に関しては、上位グループの結果より、個別属性の共通点として主将の経験、高い競技成績、学内上位の学業成績（GPA）があげられる。これらの結果から、リーダー的役割が社会人基礎力の育成に関与していること、スポーツや学業において成績を残すことが自己実現に少なからず関係していることが伺える。就職活動に対するインタビューでは、「広告や印刷業界で働きたいという思いから、自身の強みである協調性を主将の経験をもとにアピールを行った」

（A）や、「リーダーという役割が自分を一番成長させてくれることを学んだため、リーダーシップが求められる仕事を続けたい」（B）など、自身のやりたいことややりたい人物像、キャリアについて具体的に考えており、自己実現の欲求が強く、また就職活動を通しての反省点や学びも具体的なものが多い傾向にあった。このグループの学生は自己実現に対して高い満足度を示しており、大学から表彰を受けていることや複数の内定先を得ていることから、模範的な体育会学生と言って過言ではない。役職や成績といった部分も深く関係していることが伺えたが、個人的な見解として、これらはもともと社会人基礎力が故に得た役職や成績である可能性もあり、役職に対する責任を全うする経験や成績を出すまでの過程が強く関係しているのではと考えた。

続いて、下位グループに関しては、競技成績や学業成績（GPA）など個人属性に関して、上位グループと比較して若干低い傾向にあったが、大きな差はなかった。しかし、インタビュー調査を通じて、就職活動に対しての満足度や自身のキャリアに対する考え方に差が大きくみられた。まず、就職活動に対する満足度では上位グループと比較して低い傾向にあり、「企業研究や学力検査をもっと行う必要があった」

（J・K）と後悔の念を残す回答を受けた。自身のキャリアについては、地元志向が強く、働きやすさや制度の部分を重視している傾向が強かった。上位グループと比較して役職や成績といった部分に差はあまりみられなかったことから、役職や成績が社会人基礎力に直接的な影響を及ぼしているのではなく、成績に至る過程や役職に対してどのようなマインドで

臨んだかが社会人基礎力や自己実現に強く影響している可能性が示唆された。

次に3要素それぞれに焦点をあてると、まず、前に踏み出す力に関しては、主将や副主将などなんらかの役職を経験している学生ほど高い傾向にあった。インタビュー調査を行う中で、「主将を務め、チームを牽引し士気を高めることやミーティングを仕切るなど、中心的役割を経験する中で前に踏み出す力が高められた」(A) や、「副主将として主将の背中を押したり、部員の相談に乗ったりと、主体的な行動が求められた」(D) など、役職から前に踏み出す力を得ていることが明らかになった。しかし、役職を担っていたから高いという関係性はなく、高い学生は様々な役職を通じて能力を得ていたことが明らかとなった。このことから、社会人基礎力12項目の平均値に対する考察と同じく、役職を担うこと自体に優位性はなく、役職を担う中でどのような策を講じたか、どのような失敗や成功経験があるか、経験から何を学んだかなど、PDCA サイクルをいかに意識して取り組めたが大きく関わっていることがわかった。

考え抜く力に関しては、社会人基礎力12項目の平均値とほぼ同じ結果であり、上記の知見と同じことが言える。

チームで働く力に関しては、他の3要素と比較して平均値が高いことと、インタビュー調査の際、「部活動経験を通して、団体種目であったためチームワークが自然と身についた」(G) や、「厳しい先生だったため、礼儀や時間など規律性を教えて頂いた」(J) といった回答から、部活動経験そのものが考え抜く力の育成に関係していることが考えられる。上位グループの共通点として、アルバイト無経験があげられたが、インタビュー調査の結果より、卓球部の練習量の多さや部員数の多さからチームワークが求められていたことがわかり、アルバイト経験よりも部活動経験が大きく関係していることが考えられる。また、部活動経験だけでなく、人間関係や大学生活におけるゼミ活動など、様々な経験から能力を得ていることから、体育会学生だけでなく、多くの大学生に共通して高い能力である可能性が考えられる。

6. 結論と今後の課題

本研究では、体育会学生の現状を様々な観点から分析し、自己実現を満足に達成している学生の共通点を明らかにすることを目的とし、体育会学生に対して社会人基礎力や就職活

動など多方面からインタビュー調査を行った。その結果、共通点として、高い競技成績や学業成績(GPA)、自己のキャリアの具体性、自己成長欲の高さがあった。さらに、主将や副主将などの役職、就職活動など様々な経験に対して具体的かつ高い目標を持って取り組んだ学生ほど自己実現を達成していることが明らかになった。また、これらのことから、就職活動やキャリアに不安を持つ学生に対して、上記にあるように競技や学業において高い成績を目指し、常に具体的かつ高い目標を持って取り組むことで不安の解消に繋がるのではないだろうか。

今後の課題として、本研究の限界として調査対象の少なさと一大学のみでの体育会学生が対象であるが故の対象の幅の狭さがあげられる。また、体育会学生の考察を行う観点として、部活動以外の観点、例えば留学やゼミ活動、アルバイト経験など、さらに分析する幅を広げることで研究を深めることができると考える。

引用文献

- [1] https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2016/08/Athlete-Students-Report_201608.pdf
体育会学生の就職活動調査 2016年8月発行
- [2] <https://job.career-tasu.jp/2017/features/athlete/realdata/>
キャリアタス就活2017 データで見るアスリート学生の就活
- [3] 葛西和恵 体育会所属新規大卒者の特性—体育会学生は企業にモテるのか?— 法政大学キャリアデザイン学部紀要 Vol.9 2012
- [4] 萩原悟一 他 大学生ラグビー部を対象とした競技活動経験と社会人基礎力の関連 2017
- [5] 松繁寿和 体育会系の能力(特集 スポーツと労働) 労働政策研究・研修機構 2005
- [6] 一般社団法人 日本経済団体連合会 高等教育に関するアンケート 2018
- [7] 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 上場企業における英語活用実態調査 報告書 2013
- [8] 株式会社大学スポーツチャンネル 体育会学生就職活動動向 2016
- [9] 濱崎羅奈 学生アスリートにおけるキャリア教育の一考

察～高知工科大学のアスリート教育の在り方とは～ 2016

[10]川名和美・竹本雅美著（2016）「社会人基礎力を養うアントレプレナーシップ」中央経済社

[11]経済産業省著（2010）「社会人基礎力育成の手引き」河合塾

[12]渡辺かおり 他 企業における若年層の社会人基礎力の年次変化に関する考察 2011

[13]斎藤隆志 大学スポーツ組織活動を通じて獲得する能力に関する一考察－知識基盤社会でもとめられる能力としての「スポーツだから」概念について－ 2009

[14]http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/univas/index.htm

スポーツ庁 一般社団法人 大学スポーツ協会（UNIVAS）